2018年
6月6日
水曜日

石のコインからビットコインまで

田中　敦　教授（金融論）

ビットコインなどの仮想通貨が、世間を騒がせています。物々交換から主な商品が貨幣となり、金銀に集約され、やがて商品価値のない紙幣が主流になりました。つぎは「仮想」だなんて、革新的な感じがします。

重さのない仮想通貨とは逆に、重い巨大貨幣として有名なのがヤップ島の石貨です。大きいものは、直径4メートルほどの石の塊です。貨幣ですが、実は儀式など限られた場面でしか使われておりません。日頃の売買は、貸し借りを台帳に記録することで行われています。石貨は、台帳の代わりに儀式などで使われる代用貨幣なのです。[1]

人類学の発展で分かってきたことですが、人類史上、物々交換が中心だった経済はないそうです。[2] 売買で昔から良く使われてきたのは、貸し借りを記録する台帳の制度でした。BC3000年、人類最初の文明の一つであるメソポタミア文明のシュメール人たちはコインを使っていましたが、それは主に貸し借りを記録する台帳のためでした。[3] つまり、物々交換から商品貨幣が生まれたのではなく、そもそも貨幣とは台帳であり、コインなどはその代用品として使われてきたのが、人類の歴史なのです。

現代では、貨幣は現金と預金です。預金とは、銀行の台帳です。振込みをすると、銀行は支払人の預金台帳にマイナスの金額を書き込み、受取側の銀行は受取人の預金台帳にプラスの金額を書き込むだけです。

もちろん、支払側の銀行は受取側の銀行におカネを渡さなければいけません。これは現金ではなく、銀行が日本銀行にもっている預金で処理されます。つまり日本銀行は、支払側の銀行の預金台帳にマイナスの金額を記録し、受取側の銀行の預金台帳にプラスの金額を記録するのです。

現代では現金よりも預金の方が圧倒的に多く使われていて、その預金は台帳です。その台帳ではできない細かい支払いに、現金が代用品として使われているとみることができます。

今話題の「仮想通貨」をみてみましょう。これにはブロックチェーンという分散型台帳技術が使われています。最新ITを駆使していますが、要するに台帳なのです。結局、記録する技術は目覚ましく発展しましたが、貨幣が台帳であることはシュメール人たちと何ら変わりありません。

では仮想通貨に革新性がないかというと、あります。それは「分散型」で、中央銀行のような全体を管理する中央組織がない点で、これは人類史上前例がないと思われます。

長年、貨幣とは目の前に見える商品、金銀、紙だと理解されてきました。しかしそれだけを見ていては、貨幣の本質も仮想通貨の革新性も見えてきません。今日のチャペルの聖句にあるように、見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ（コリントの信徒への手紙二　第4章18節）ことが、物事の本質を理解するために大切です。■

1 マーティン、フェリックス著、遠藤真美訳『21世紀の貨幣論』、東洋経済新報社、2014年、20–21頁。
2 同書、16–17頁。
3 Orrell, D. and R. Chlupatý *The Evolution of Money*, Columbia University Press, 2016, pp. 15-17.